

第1回 篠路駅東口駅前広場の在り方検討会議 議事要旨

【日時】平成30年6月6日(水) 18:10~20:10

【場所】篠路コミュニティセンター会議室A・B

【出席者】

○委員(全14名)

地域委員(11名)

所属/役名等	氏名(敬称略)
篠路連合町内会/会長	伊藤 英夫
篠路連合町内会/副会長	進藤 幸司
篠路地区街づくり促進委員会/会長	井形 信広
篠路地区街づくり促進委員会/副会長	山田 勝敏
篠路地区街づくり促進委員会/総務理事	熊澤 修
篠路中央商店街振興組合/副理事長	寺田 哲
札幌市農業協同組合/理事	高見 敏文
篠路地区社会福祉協議会/会長	藤井 國夫
わきあいあい篠路まちづくりの会/会長	中渡 憲彦
区画整理地権者	砂山 康俊
区画整理地権者	中西 昌裕

有識者委員(3名)

所属/役名等	氏名(敬称略)
北海道大学大学院工学研究院/教授	小澤 丈夫
北星学園大学経済学部/教授	鈴木 克典
NPO法人旧小熊邸倶楽部/理事長	東田 秀美

○ オブザーバー

所属/役名等	氏名
まちづくり政策局総合交通計画部 交通計画課/交通施設担当課長	長南 成明
建設局土木部 道路課/特定街路担当課長	櫻井 英文
都市局市街地整備部 区画整理事業課/区画整理事業課長	久米田 真人
北区市民部 篠路出張所/篠路出張所長	國方 大翼

○ 事務局

所属/役名等	氏名
まちづくり政策局都市計画部 事業推進課/事業推進課長	高田 洋
まちづくり政策局都市計画部 事業推進課/計画調整担当係長	若林 裕也
まちづくり政策局都市計画部 事業推進課/計画係	森川 雄太
まちづくり政策局都市計画部 事業推進課/計画係	大路 陽介

【議事・進行】

- 1 篠路駅東口駅前広場の在り方検討会議について
 - 篠路駅東口駅前広場の在り方検討会議について
 - 設置要綱
- 2 委員長及び副委員長の選任について
- 3 駅前広場の考え方と地域資源について
 - 駅前広場の検討に係る諸条件について
 - わきあいあい篠路まちづくりの会資料
- 4 検討資料等に関する意見交換

【議事要旨】

1. 篠路駅東口駅前広場の在り方検討会議について

(まちづくりの経緯)

- ・昭和9年度における篠路駅開業以降、地域住民との協働によるまちづくりの取組が進められている。
- ・篠路は平成25年度に札幌市まちづくり戦略ビジョンにおいて「地域交流拠点」として位置づけられ、平成27年度には拠点としての機能・魅力向上に向けて取り組む先行的な地域となった。
- ・平成28年度より、社会基盤整備を契機として地域主体のまちづくりを進めるためにワークショップを開催している。
- ・平成30年3月に鉄道高架事業や土地区画整理事業について都市計画決定を得た。

(整備の概要)

- ・都市計画決定されている事項は、篠路駅東側の駅前広場までの道路幅員、駅東通の延長、約3700㎡の駅前広場を設けることである。
- ・土地区画整理事業の事業認可までに、駅東通や駅前広場の設計として、ロータリーの形状およびそのしつらえについて検討を行う必要がある。

(篠路駅東口駅前広場の在り方検討会議について)

- ・都市計画審議会において寄せられた意見書の中には、駅前広場にある軟石倉庫の存置や移転などによる存続を希望する意見や、倉庫保存後の活用については地域住民、民間事業者、行政が協働しながら活用方法を検討することを希望する意見等があった。
- ・これらの意見書の内容を踏まえ、地域とともに篠路駅東口駅前広場の在り方を検討するために篠路駅東口駅前広場の在り方検討会議（以下、「本会議」とする）を設置した。
- ・本会議の委員は、地域を代表する団体などに委員や地域団体の推薦を依頼したほか、地権者や有識者など幅広い視点からご意見をいただけるよう選任した。
- ・平成30年度内の土地区画整理事業の事業認可を目指すにあたり、本会議で扱う駅前広場の整備内容について9月までには結論を出す必要がある。
- ・本会議は全3回を予定しており、札幌市は本会議における意見を踏まえ、整備内容を検討・決定する。

2. 委員長及び副委員長の選任について

- ・委員長として北海道大学大学院工学研究院の小澤教授、副委員長として篠路地区街づくり促進委員会の井形会長を選任した。

3. 駅前広場の考え方と地域資源について

(駅前広場の検討に係る諸条件について)

- ・駅前広場の機能として、交通結節機能及び都市の広場機能に分けられる。交通結

節機能とはバスやタクシー乗換などのターミナル交通を処理する機能であり、都市の広場機能については以下の5つの機能に分けられる。

- ①地区の拠点形成する市街地拠点機能
- ②憩い・集い・語らいの中心となる滞留スペースのような交流機能
- ③都市の顔としての景観を形成するモニュメントなどの景観機能
- ④公共的サービスを提供するようなトイレなどのサービス機能
- ⑤防災活動の拠点となるようなオープンスペースなどの防災機能

- ・札幌市は、駅前広場に求められるこれらの機能を踏まえ、歩道幅員に余裕を持たせ、滞留機能を兼ねた歩行者にやさしい歩行空間を確保するとともに、国の指針を参考に、バスの回転半径等を考慮し面積や形状を設定し、円滑なバスの乗降のため、2台分のスペースを確保している駅前広場のレイアウトを想定して都市計画決定を行った。これは、3棟ある軟石倉庫の全てのスペースにかけてロータリーが伸びるレイアウトである。一方、ロータリー形状を少し小さくし、バスの乗降スペースは1台分として、また、タクシー待機スペースの大きさを小さくすることにより、軟石倉庫のうち1棟は、ロータリーに支障がないレイアウトとなる。

(軟石倉庫について)

- ・軟石倉庫を存続させる場合、存続方法や法的な検討が必要となる。
- ・存続方法として、①現位置存続、②建築物としての移設、③倉庫に使用されている資材活用の可能性があり、いずれの方法についても利用方法やコストなどの検討が必要となるほか、①現位置存続については、駅前広場の機能の一部として残すか、またはまちづくりのスペースとして残すかについても検討が必要となる。
- ・駅前広場の機能の一部として残す場合、都市計画決定の変更は不要で事業スケジュールへの影響はないが、道路や建物等について行政としての必要性について整理する必要があり、容易ではないと想定される。また、まちづくりのスペースとして残す場合、都市計画決定の変更が必要で、事業スケジュールへの影響がある。
- ・法的な検討については、現位置存続の場合、新築の場合いずれにおいても、都市計画法や建築基準法等の関連する法令があり、これらを考慮する必要がある。
- ・どのような活用を図るにしても、現所有者様の意向確認などは継続的に行う必要がある。

(わきあいあい篠路まちづくりの会について)

- ・わきあいあい篠路まちづくりの会（以下、「篠路まちづくりの会」とする）は、平成28年度における札幌市のまちづくりワークショップをきっかけに、篠路のまちづくりについて議論を継続するために平成29年11月に結成した。
- ・軟石倉庫は篠路地区における重要な地域資源であると認識しており、当該倉庫を保存活用することについて検討している。篠路まちづくりの会として、軟石倉庫を保存し、公民連携の取組や民間資本の導入も含めた市民との協働を継続することを要望する意見書を1通提出した。

- ・ 保存活用を実現するための諸条件や要検討事項は認識しており、本会議とあわせ篠路まちづくりの会においても検討も進める。

4. 検討資料等に関する意見交換

(委員)

- ・ 議論の主なポイントは、ロータリーの形状をどうするかということと、軟石倉庫(以下、「倉庫」とする)が地域資源として重要かどうか、重要な場合はその残し方についてである。
- ・ 倉庫が本当に必要で活用すべきものか考えていかなければならず、それによってロータリーの利用方法もかなり変わってくる。また、倉庫所有者の意向によっては残すことはできない。倉庫以外での札幌軟石の活用方法等も考慮して検討を進めることが必要である。
- ・ 採用するロータリーの形状により、倉庫の残し方が違ってくる。
- ・ 倉庫所有者の意向により、検討の方向性が大きく異なる。所有者との協議はどこまで進んでいるのか。また、ロータリーの形状は、バス事業者が乗り入れる見込みがなければ、大きくする必要はないと思う。バス事業者との協議の状況についても教えてほしい。そのほか、篠路駅を交通結節点として考えているのであれば、駐車場や駐輪場について札幌市から説明があればもう少し具体化すると思う。

(事務局)

- ・ 札幌市として、倉庫所有者に対し倉庫を残してほしいというアプローチはしていない。活用を検討している主体が、倉庫に対する思いや活用の方向性を伝えることが必要である。札幌市としては、所有者は区画整理区域内の権利者でもあるため、接触の機会はあるが、倉庫が大事だと認識されていることは嬉しいが、札幌市との交渉が白紙の現段階において倉庫を残すかどうかはわからない、また、今後も倉庫事業は継続していきたい旨伺っている。駐輪場については、鉄道高架下の活用も視野に入れている。

(オブザーバー)

- ・ バス事業者との協議について、整備した駅前広場に乗り入れる見込みの有無について、現時点においてバス事業者としては未定である。今後における周辺の開発状況等から見込まれる利用客数等を勘案し、判断することになる。

(委員)

- ・ 倉庫をなくして大きなロータリーをつくった結果、バスの乗り入れが少なかったとしても、現在の法律では同様の倉庫を立て直すことができない。バスが少ないのであれば小さいロータリーでよく、倉庫を残すことが可能となるため、早めにバス事業者と相談していただきたい。

(オブザーバー)

- ・ 現時点では判断材料がないため、バス事業者に判断を求めることは難しい。札幌市としては、バスの乗り入れがあることを想定して検討を進めていきたい。

(委員)

- ・ 行政を動かすためには、本会議のような機会を活かして地域の意見をまとめるこ

とが重要である。ここまで札幌市から説明のあった内容は、現時点において可能な範囲で検討した行政の考え方を示したものであって、(ロータリー形状など)本会議に必要な議論は、これらの検討結果ありきのものではないと認識している。

(事務局)

- 札幌市としても今後の検討事項であると考えている。ただ、都市計画決定を受けているものについては、決められた枠の中で検討を進めていく必要があり、事業を遅らせることは困難である。本会議は、諸条件の中でできることについて議論する場であると考えている。

(委員)

- これまで時間をかけて検討してきたことを尊重しながら、必要な事項を加味して検討を進めることが重要である。
- 倉庫を残すことありきで話を進めるのは違うと思う。バス事業者に乗り入れてもらえるような仕組みやまちづくりを検討し、バス事業者に提案することが適切な順番だと思う。将来的に駅を中心として篠路のまちをどうしていくかについて議論をした結果、ロータリーの形状が決定し、倉庫を残すかどうかという流れになると思う。倉庫を残す価値があるか、歴史的建造物と言えるかどうかについても併せて検討し結論を出していくことが良い。
- 以前は拓北や茨戸方面からの篠路駅経由のバス路線が複数あったが、採算が合わず多くの路線が廃止されている。篠路出張所の機能を強化しても、茨戸、太平、屯田の住民は篠路出張所に来る手段がなく、近隣住民以外の方にとっては機能強化のメリットが少ない。2台入ることができるのはよいが、まずは篠路駅経由のバスを増やす働きかけが必要である。
- 今後高齢化が進む中で、公共交通がより重要になってくるだろう。駅はまちの顔となるため、住民や団体からこれまでに出示された意見を踏まえ、まちのビジョンをもつことが重要である。交通結節点として、どの程度の乗降客数にして、どのようなまちにしていきたいのかについて、既存のJR駅のデータ等を参考に検討してはどうか。検討したビジョンにより、必要なバス数がみえてくるので、移設も含めて倉庫の検討ができると思う。人口減少が進む中、大型バスだけではなくコミュニティバス、Uber等のICTを使って利用するバス、自動バス、パーソナルモビリティ等様々な可能性を考慮して検討できると良い。特に交通結節点においては、歩きやすさや動きやすさを考慮することが重要であり、高齢者の方やベビーカーなどの利用も踏まえて議論すべきだ。
- 駅前には、防災拠点として十分なスペースを確保することが必要である。

(オブザーバー)

- 現状における篠路駅の乗降客数は約6,000人/日であり、微増傾向にある。また、篠路における人口は緩やかに減少すると見込んでおり、6,000人規模の状況客数/日が続くと想定している。バスについては、花畔札幌線は現在3系統あり、例えば午前7時台では上り下り合わせて8本のバスが運行しており、こういった状況も踏まえ、2台分の滞留スペースを確保するロータリーを想定している。

(委員)

- 10年後における篠路の人口や、若い世代のJR、バスの利用は急激に減少することはないと思われる。篠路は福祉関連の施設が充実していることも考慮すると、将来的に新しい交通機関ができる可能性があると思う。倉庫については、篠路まちづくりの会の考えに賛同できる一方で、若い世代がどのように思うかが大切である。ロータリーについては、外側の道路を拡幅することから必ずしもバスをロータリーに入れなくても良く、1台分で機能すると思う。
- 駅前広場の必要性和倉庫への想いがぶつかっているように感じる。篠路駅前は篠路の玄関である。人的、文化的、物流的な交流により人が集まり、経済効果をもたらす総合的な視点が必要であり、その視点が欠けると心のふるさとなる篠路のまちを実現することは難しいと感じる。また、長期的な視点で将来像を描き、子どもたちに引き継いでいくための検討をする中で、様々な課題が浮かび上がる。その中で根本的な議論をすることで方向性が自ずと見えてくると思う。駅前広場の活用と倉庫を残すかどうかの検討だけに焦点を当てるのではなく、地域の方々のニーズを反映させる検討が重要である。
- これまで、歴史的建造物の保存については、対象となる建造物を保存することに重きを置いた議論が多かったが、最近では、保存だけを目的にするのではなく、まちづくりと併せてどのように活用していくかが重要となってきた。篠路においても、広場を設けること、倉庫を残すこと、活用することのすり合わせが必要である。
- 倉庫の存続に必要なコストや適用される法律を考慮すると、存置も移設も実現は難しいと思う。
- 本日の説明は駅前広場が中心の内容となっているが、住民としては札幌花畔線から篠路駅に向かう駅前通について心配している。札幌市の区画整理事業は道路などの整備までであり、商店街をつくるなどの取組は民間活力の範囲である。仮に倉庫を残し、店舗等として活用するとしても、来店客用の駐車場があるのか、駅前通はどうなるのか、JR利用客を中心とした経営で成り立つか等を考えると難しいと思う。また、駅前通には子どもの送迎のために停車する車両が多く、停車スペースが考慮されていないと感じるほか、東側は乗降客が少ないため、東側にロータリーの大きなスペースが必要なのか。また、篠路出張所の機能がどこになるかによっても状況は異なるなど、不確定要素が多い現状において駅前広場をどうするかという総合的な判断は困難である。
- 子どものころから60年以上篠路に居住している。駅前通は交通量もお客も少ないために、商売を続けることが難しくなったお店をみてきた。篠路駅周辺で商売をする場合、JR利用客だけではなく、東西を連絡する交通機関が重要になってくると思う。また、自分も参加している促進委員会のメンバーは高齢者層が多く、整備が完了する頃には時代遅れになっているのではないかと危惧している。10年後には常識になっているかもしれないUberや無人バスなどの技術進歩等も考慮し、検討を進めることが必要である。
- 篠路まちづくりの会では、倉庫について実際に活用していくことを前提に検討を進めており、今後具体的に提案していきたいと考えている。歴史的建造物として

認められるためには複数の条件がある。築後50年以上経過していることのほか、地域固有の材料を使用していることや技術が優れていることなどの付加価値が必要であり、倉庫は歴史的建造物に該当する。これまでは倉庫の価値をそれほど意識しなかったため、具体的な働きかけが行われなかったと思われる。また、本会議に女性が一人のみであるが、女性や子どもいる篠路という地域であるということ踏まえて、どういう篠路をつくっていくか検討することが必要であると強く感じる。

(事務局)

- ・駅前広場に在り方は、篠路駅周辺のまちづくりの方向性を踏まえて検討するべきだと伺った。次回検討会議において具体的なものを提示することは難しいが、札幌市として取り組めることを考えていきたい。

(委員)

- ・不確定要素が多い中ではあるが、できることを一つずつ提案して議論を深めていきたい。事業計画についての検討と議論も重要であり、次回はアイデアを出し合い一歩踏み込んだ議論をしてはどうか。これまでの経緯も踏まえ、篠路まちづくりの会には、地域の顔となるような事業の可能性やビジョンをお示しいただきたい。
- ・篠路まちづくりの会では会員を限定しない開かれた会を開催しているので、多くの方に参加していただき、忌憚のない意見をいただきたい。駅前広場の機能を損なわず、グレードアップさせながら、文化性や歴史性を駅に残していきたい。篠路らしいものを残していくきっかけとして、倉庫のたたずまいは大事だと思っている。西口駅前広場の機能や将来の交通体系も考慮する必要がある。なくなったものは再生できないことから、残せるものは残していきたいというのが、篠路まちづくりの会の精神。今後とも皆様からご意見をいただきたい。
- ・札幌市としても、本日の議論を踏まえ、追加で提供できる情報や考えがあるかどうか検討し、次回にご提示いただきたい。次回は、事務局（札幌市）と篠路まちづくりの会で準備したものを材料にしながら、議論していきたい。
- ・篠路まちづくりの会から、クラウドファンディング等でお金が集まるような魅力ある事業プランが提案されると議論が深まると思う。

(最後に：事務局)

- ・次回は7月30日、篠路出張所2階にて18時から開催する。